

現代社会の世俗性と宗教性

井上 順孝



一、宗教ブームの実態

私は主に近代の日本の宗教運動を調べております。また、現代の新しい宗教動向と申しますか、特に若者の間に見られる宗教観、そういう事に関心を持っております。そこで本日は、現代の日本人は宗教的なことに関して、どういう方向に向かいつつあるのかというようなことをお話したいと思います。

現代の日本の宗教状況に関しては、いろんな議論がありますが、一九八〇年代あたりには「宗教ブーム」とい

う言葉がよく使われました。その他、第三次宗教ブーム、第四次宗教ブーム、新新宗教ブーム、さらには呪術、オカルトブームといった言い方もされました。宗教学者が使った概念もありますが、むしろ宗教ジャーナリストあるいは、評論家が多分に自分の印象に基づいて言っているという場合も、しばしばありました。つまり厳密に宗教社会学的に分析した上で、結論を述べているとは限らない。ちょっとした現象を針小棒大的に議論するということもけっこうありました。それが、いろんな説が乱立した一因です。

宗教ブームという言葉には、いろんな内容がこめられておりますけれども、第三次宗教ブームとか第四次宗教ブームというときには、これは基本的には幕末以来の新宗教ブームについて言っているようです。第三次説を唱えている人は、幕末維新期が第一次宗教ブーム、戦後の混乱期が第二次の宗教ブーム、そして一九七〇年代以降が第三次の宗教ブームということで第三次というふうに言ったわけであります。

第四次宗教ブームという場合には、この三つの他に明治末から大正にかけても一つの大きなブームがあることを主張したわけです。このときのブームには大本などというのが中心にあるわけですが、そういうのを数えまして第四次というのが普通であります。ところが中にはそうではなくて、先程の第三次の次に八〇年代にまた新しく波が起こったとして、それを第四次だと言っている人もおりまして、いささか混乱気味です。

それから新新宗教という言葉もよく聞かれると思いますが、これも人によってずいぶんいろんな定義の仕方があります。大体一九七〇年代以降にできた一部の特徴あ

る新宗教に対して新新宗教と呼ぶという規定が、その中ではまあもつとも妥当かなと思っています。中には一九七〇年代以降に大きくなったのはみんなそうだというやや大雑把な規定もありますし、そうではなく手かざしか、呪術的要素の強いもので、若者を集めている一部の教団に限定して言っている人もあります。マスコミになると、これは新興宗教という言い方とほとんど同じです。つまり最近目立ってきた新宗教という捉え方です。そういうわけで、新新宗教という概念は不要な混乱を招いているので、私は使わないようにしています。これらをいちいち説明するのが今日の主旨ではございませんので、これについてはそれほどお話しいたしません。要はこういうブームという言葉はどうも疑わしいというのがまず私の申し上げたいことであります。

最近新しい運動が次々出現しているのは確かですが、これは決して初めての現象ではありません。近代日本には無数といってよいほどのいろんな宗教ができてきました。あるものは短時間に運動が消滅しましたし、非常に大きな教団となりました。「老舗の新宗教」として

は、天理教とか金光教とか黒住教というのがあります。

こうしたものがある程度社会に定着して、既成宗教と余り変わらないような形になってくる場合もあります。新しく生まれた運動の運命は様々ですが、たえず新しい運動が出現するというのは、近代の特徴です。戦前なども、数え方によりますが、何百、何千あるいはそれ以上の宗教結社があったという説もあります。むしろ、十名とか二十名とか、小さな組織を含めての話であります。

若者が新しい運動に惹かれるというのも、これまた最近に限られません。新しい運動というのは伝統的な価値観に抵抗する面、挑戦する面、それを乗り越える面があります。そうした新しい宗教運動には、若い人の方が比較的抵抗なくはいります。思考の柔軟性ということが関係するからです。したがって若い人が多いというのは、別に新新宗教とよばれている運動の特徴ではなくて、新しい運動はつねに若い人を中心に広まってきたということなんです。創価学会も周知のとおり、その草創期には若者を中心とした運動でした。数からいえば、その当時創価学会にひかれた若い人たちというのは、おそらく今

の新新宗教にひかれる若い人達全部合わせたよりも多いと思います。若い人と新しい宗教運動とが親和性があるというのは、ごく当たり前の話なのです。

二、日本人の宗教への態度

では最近、特に一九七〇年代以降、日本人全体は一体宗教に対してどんな態度をとるようになってきているのかということですが、これは一言でいいますと緩やかではあります。脱宗教、厳密に言う脱宗教教団という傾向を見せております。これにはいくつかの根拠があります。最近の世論調査の例から申しますと、一九九四年の六月に読売新聞が行なった調査があります。その結果なんです。たとえば「宗教を信じていますか」という問いがあります。一九七九年で見えますと、ちやうど宗教回帰だ宗教ブームだとか言われ始めた頃で、たしかにその頃では宗教を信じているという割合が高かったといわれる時代なんです。それでもこの問いにイエスと答えた人は三三・六%で、ノーが五九・四%という比率です。それが一九八四年ですと、イエスという人

が二九・一％になっている。それから八九年には二八・〇％、九四年の調査では二六・一％です。私たちは普通日本人が宗教を信じている人の割合は、大体三分の一であるというふうに言ってきたんですが、こうなってくる

と三分の一ではなくて四分の一に近くなりつつあるようです。それから「幸せな生活を送る上で宗教は大切であると思いますか」という問いでは、七九年の四六・二％から、八四年は四三・八％、八九年には三八・〇％、九四年は三四・二％と、これも確実に減っている。幸せな生活を送る上でという限定つきではありませんが、宗教が必要であるというふうに答える人は減ってきているということです。ちなみにこの読売新聞は一九五二年に、まだ戦後の混乱期ですが、その時にも同じような調査を行なっております。その時はどうであったかという、宗教を信じているかという問いに対して、イエスと答えた人は六四・七％。その中で心から信じているというのは五二・五％。

そうしてみますと、戦後は上がり下がりはあるんですが、

が、マクロに見ると、緩やかに下がってきている。七〇年代半ばに、一時期ちょっと上がったことがあるものですが、その時宗教回帰だとか宗教ブームだとか言われた。NHKの放送世論調査で、ちょうど石油ショックの直後にそれまでずっと宗教を信じる人の割合が減っていたのが、やや上向きになった。一〇％近くも上がったものですが、これはすごいということになったのですが、その後調べてみると、その後はまた下がる傾向になっているんです。ですからある時期ボンと上がった、その背景を考えるとそれは大事ですが、戦後の日本社会ということとを特徴づけるなら、下降傾向にあると言わざるをえません。

ついでに五二年の数字をもう少しつけ加えますと、ちょっと質問の内容が違いますが、やはり宗教は我々の生活に対して必要なものと思えますか、それともなくてかまわないと思えますかという問いには、必要だと思う人が七四・〇％もあつた。つまり四分の三が終戦間もない頃は宗教は必要だ、大切だと思ったんですね。だから戦後の混乱期で、価値が混乱したとか、戦前のものが否定

されたとかいろいろ言われましたけれども、こと宗教に関する限り、その当時はまだ日本人はよほど信心深かったということが言えます。

次に一九九二年の夏に国学院大学の日本文化研究所が中心になつて行った大学生の意識調査について紹介します。これはランダム調査ではないのですが、対象とした大学は三十二の大学で、集まった有効回答者数は四〇〇五ですので、ある程度今の大学生の考え方というものを推測できると思っています。

私立大学の中には宗教系の大学があります。宗教系の大学ですと当然信者の方もいますし、一般の大学生とは、少し考え方が違うかもしれませんので、今日お話しするのは宗教に関係のない大学にいつている大学生の回答の内容です。人数では一、六二九名になります。これで見ますと、特定の宗教を信じているというふうに答えた人が一一・三％です。特定の宗教を信じてはいないが、宗教には関心があるというふうに答えた人が三五・八％。宗教を信じてないし、宗教に関心もないと答えた人が五二・七％です。具体的に、どんな宗教を信じているかを

みますと、一番多かったのは仏教と答えた人で全体の四・九％です。ここにはしかし仏教系の新宗教も含まれている可能性があります。二番目が創価学会で、三・七％です。次がキリスト教で一・二％。神道は〇・九％、天理教は〇・一％という結果になりました。その他、新宗教の教団名をあげた人も若干ありますが、これは少ない数でありました。

では宗教を信じてはいないが関心があるという人に、どんな形で関心をもっているかと聞いてみたところ、一番多かったのは、宗教団体には属したくないが宗教的な感情は大事にしたいという選択肢を選んだ人です。宗教に関心をもっているという人のうちの約七割はそういう回答でした。それからいろんな情報に関心を持ち、情報を集めるという選択肢にチェックした人が約三割、機会があつたら、入りたいと思っているという選択肢を選んだ人は、かなり少なかったです。

それから宗教を信じてないと回答した人に、なぜ信じていないかということ聞いたところ、一番多かったのはやはり特に理由がないという答えでした。これが約半

数であります。それから自分には必要ない、そういうふう
に答えた人が約三割です。特に宗教に接する機会がな
かったという人が二四%ほどでした。それから宗教に悪
いイメージがあるという選択肢を選んだ人は一二・八%
でした。もつと否定的に、宗教に関する嫌な体験がある
という選択肢を選んだ人は一・七%でした。(詳細な結果
分析については、『国学院大学日本文化研究所紀要』七十二輯、
及び七十三輯所収の、拙論及び磯岡哲也論文を参照)

こういうふうな宗教社会学的に分析してみますと、若
い人達の間で宗教ブームとはどうも言い難い。ただ宗教
には関心がある人はけっこういる。自分は教団に所属す
るのは嫌だけれども、何か関心がある、という場合その
関心とはなんだろう、それを考えることが、実は現代日
本人の宗教観ということを考える作業につながっていき
ます。

三、宗教情報ブーム

先程宗教ブームはないと言ったんですが、しかし宗教
が話題になっているのは事実であります。それを私は宗

教情報ブームだというふうに言っております。宗教ブー
ムと宗教情報ブームというのはどういうふうに区別して
いるかと申しますと、宗教ブームというのは、やはりそ
れは宗教に対する関心が高まる、自分の宗教が必要だ、
あるいはいろいろ学びたい、そういう宗教そのものへの
関心が増える、それが基本だと思います。宗教情報ブー
ムというのは、宗教を信じる人や入会する人は増えなく
ても、マスメディアのレベルで宗教の関する話題が非常
に多くなって、情報に関心を持つ人が多くなる現象を指
します。

宗教に関心を持つ人が実際に増えてきて、したがって
マスコミもそれに注目して報道が増える。こういう道筋
も考えられるんですが、宗教情報ブームというのはそう
ではない。例えば十年ほど前、イエスの方舟事件があり
ました。最近ではご承知の通りオウム真理教事件があり
ます。イエスの方舟は信者数が二六名ですが、一九八〇
年代初めに大変な話題になりました。一年間ほとんどこ
の話題で持ちきりだった時期があります。それから最近
では統一教会とならんでしばしば報道されるのがオウム

真理教です。統一教会は十万人、二十万人といった信者
がいると考えられておりますが、オウム真理教はおそら
く数千人から一万ちょっとという規模でありましょう。
これは小さいとは言えないんですが、そんな大教団では
ありません。しかしこれが連日のように報道された時期
があります。また活動も派手だったからということがよ
くありますが、このように連日マスコミが扱うと、人々
はあたかもすごい現象が起こったような印象をもつわけ
です。つまり、ある宗教運動の活動が、情報レベルでは
何倍、何十倍に増幅されてお茶の間に届くということに
なります。これが宗教情報ブームを作っていきます。話
題が話題を呼んでいくという構造が生まれます。

しかしこれはいわば情報を論議しているようなところ
がありますから、情報としての価値がなくなると、見向
きもされなくなる。この良い例が幸福の科学です。私を
含め五人の編集委員が中心となり、一九九〇年に『新宗
教事典』という新宗教についての初めての総合的な事典
を作りました。編集作業をやっているときは、幸福の科
学はそれほど話題になっておらず、我々は教団一覧に載

せなかったんです。ところが事典が刊行された頃から急
に話題を呼ぶようになり、何でもこれが載っていないのか
ということになってしまいました。その後私は、一九九
二年に『新宗教の解説』(筑摩書房)という本を書き、事
典刊行以後の新宗教の動向もここには含めながら書いて
おきました。一九九二年の秋です。その頃は幸福の科学
は連日のように話題となっていました。ところが本が出
版されてしばらくたつ頃は、もう話題が終息しておりま
した。幸福の科学の信者あるいは共鳴者は、少なくとも
二―三十万人はいるでしょう。でも、なぜこの運動が起
こったのか、今の社会にどんなことを突き付けているか
ということは、ほとんど問題にされない。まさにおもし
ろおかしい部分の情報が使い切られると、次のターゲッ
トが求められるという構造になっています。これが情報
社会の特徴だろうと思います。

そういうことから、第何次宗教ブームというような
捉え方は、あまり適切でない。私はむしろ「さざなみ説」
という捉え方が実情に合っているのではないかと考えて
います。つまり、たえず新しい波があつて、おし寄せて

くる。ときにやや大きなうねりもあるけれども、全体として見るならば戦後だけに限ってもこれはいくつも節目があつて、その度に新しい運動が起こつて来ているといふことがあります。ともかくマスコミ情報に惑わされないといふ方というのが必要であるといふことです。

情報社会とは言われますが、実際にマスメディアの影響を調べてみようと、毎年学生を対象にアンケート調査をやっています。二年前、ちょうど幸福の科学とかオウム真理教とか話題になっていた頃の例を紹介します。何人かの宗教者の名前をあげて、知っているかどうかを、新入生に聞きました。これは三つの大学で三六三名の学生に聞きました。この時は次の六名について聞きました。日本人では大川隆法、麻原彰晃、池田大作、外国人ではヨハネ・パウロ二世、ホメイニ、ダライ・ラマです。一番知名度が高かったのは、その当時は大川隆法です。次が麻原彰晃、以下ヨハネ・パウロ二世、ホメイニ、池田大作、ダライ・ラマの順でした。これは何を反映しているかという、日々のテレビに登場するかしないかです。お茶の間に飛び込んでくる情報に決定的に左右されると

いうことがはっきり結果に示されました。

マスメディアの影響の大きさということを頭に入れた上で、今の日本人の宗教性というのは本当のところは何だろうといふことを、考えてみたいと思います。先程の読売の調査結果でも、宗教離れははっきりしているんですが、ところがたとえば、死後も霊魂が存在すると思うとか、死後の世界を信ずるかというような問いに対しては、減ることは減っているんですが、宗教離れに比べるとその減り方は緩やかです。たとえば一九九四年六月の読売新聞の調査ですと、死後も霊魂が存在すると思う人は三五・〇%、しないという人は二九・九%、何ともいえないという人が三三・五%ですね。だからちょっと荒っぽいですが、大体三分されるわけです。存在する、しない、どっちともいえない、というふうに。肯定と否定だけ見れば、肯定派の方はやや多いわけです。にもかかわらず宗教は信じていないわけですから、そのところが考えるべきことだと思うんです。

読売新聞は一九五二年の調査でも、「死後も霊魂が存在すると思いますか、思いませんか」という、やはり似

たようなことを聞いているわけです。このときもやはりイエスが多いんですが、イエスは四三・〇%、ノーが二四・八%、何ともいえないが二二・〇%です。一九九四年の結果は少し否定派が増えていますが、先程の宗教を信ずる人の減少に比べるとそれほど極端ではない。やや減っているということです。そうしますと宗教というものを考える上で欠かせない死後の問題、霊魂の問題、あるいは神や仏の問題というのは、宗教を信じているかどうかという聞き方をした場合とちよつと違う動きを見せるということが分かってくるわけです。

同じく先程の大学生四千名余りの調査の例でいきますと、死後の世界の存在を信じますかという質問に、信じていると答えた人が約三割。死後の世界があるかもしれないといふふうに答えた人が約四割です。約七割は信じている、もしくはそういうものがあるかもしれないといふ肯定派です。一方、疑わしいと答えた人が約一割、そんなものはないといふとはっきり否定した人は約一五%に過ぎませんでした。ちょうどこの時には宜保愛子の霊視というのがブームの頃でしたので、宜保愛子の霊

視を信じているかどうかというのを聞いてみました。信じているという人が約二六%でした。あり得ると答えた人が約三割で、あわせて約五五%は信じている、もしくはあるかもしれないという肯定派です。疑わしいという人が約二割、信じていないと否定した人は六・四%で極めて低いのです。ですからあの種の番組が高視聴率であるのもうなずけると思います。

ちよつと面白いことを付け加えておきます。今申した数値は非宗教系の大学で調べたものです。宗教系の大学に限ると、たとえば宜保愛子の霊視というのは信じている人は若干ですが減ります。厳密に言えば、非宗教系では五五・六%が肯定派ですが、宗教系では五〇・一%が肯定派です。五%ちよつとですが少ないという結果です。これは調査対象の大学にキリスト教系の学校が多かったせいかもしれません。

こういうふうに若者たち、大学生を見ていても、オヤッと思うようなことに信頼を寄せたりするんですね。私が一番注目したのは、ノストラダムスの予言についてです。一九九九年に破壊的なことが起こるかもしれないと

か、日本が沈没するとか、大魔王が来るとか、いろんな説があります。この予言を信じるかどうかを聞いてみたんですが、非宗教系の大学生の場合は、信じているという人が九・五%、あり得るという人が三四・七%、さすがにはっきり否定する割合はこの間が一番多かったんですが、それでも約四割の人はあるかもしれないと思っています。

伝統的な宗教教団に対する関心とか信頼度というのはどんどん減っているんですが、上の世代からすれば本当にたわいない話であったり、コミューンリズムに踊らされているような性質のものであったりするわけですが、そういうものに対してけっこう関心をもっている。これを一種の終末意識の強まりと結び付けて考える説があります。若い人ほど何となく終末思想をもっているという説です。やがて壊滅的なことが起こるのではないか、という漠然たる不安。それはこの地球環境の問題とか、天文学的な知識が増加していることは関係するかもしれない。ともかく破壊ということに対しては前の世代よりも敏感になっている可能性がある。そういうかす

かな終末観というものが、こういう話を聞いたときにちょっと刺激されて出てくるのかもしれない。この点はずっと詳しく調査する必要があります。

四、教団宗教の曲がり角

こうしてみますと、現代日本人は、いわゆる宗教とか宗教教団への関心というのは明かに低下しつつあるが、死後の世界とか霊界とかいったようなことに対する関心とか、信じようとする心というのは、それほど低くないということが分かります。若い人の間には死の話などというのはかなり関心が高い。さらに、いわゆる民俗宗教、つまり初詣とか七五三、節分、彼岸、お盆、さらには車のお祓いとか地鎮祭とか、こういったものが、形を変えつつ、なかなかすたれないことも大きな問題です。そうしたことを考え合わせると、教団宗教、すなわち教団を中心とした宗教のあり方が、一番曲り角を迎えている。

ただし、死後の世界とか、霊界とか、そういったものに対する関心というのは、宗教的な関心だけではない可

能性があります。こういう死後の世界とか、霊界とか、そういったものに若い人が関心を持つと、すぐこれは宗教性が高いとみるのは、単純過ぎるかなと思います。たしかにこれらは宗教に深い係わりをもちますけれども、科学的な関心である可能性もあります。つまり人間は死んだらどうなるのか、それから死の瞬間というのはどうなるのか、事実を知りたいということがあると思います。一時期臨死体験などが話題になりましたが、そうした体験を読んだからといって別にお寺に行くとも限らないし、宗教書を読むとも限らない。死とか死後の世界そのものに興味がある。臨死体験などを細かく知りたいがるのは、一種の実証主義とも言えます。

ご承知の通り、今の科学は本当に壮大な話をします。ビッグバンの話から、地球の誕生、そしてやがては地球の将来まで、やがて太陽が膨張して地球に人間はすんでいられなくなるということなど。これは百億年単位の話ではありますけれども、地球の死は必ず訪れる、そういうことを科学は教えてくれるんですね。そういう知識を得た世代は、天地創造とか、終末とか、かつてはほとん

ど宗教だけが論じていたテーマを、むしろ宗教抜きで人々の遠い昔から遠い未来の果てまで考えるのかもしれない。そういう可能性もありますので、繰り返すようですが、死とか霊界への関心が、すぐさま宗教への関心というふうに考えるのは、留保をつけておいた方がいいと思います。

そうした留保条件付きですが、民俗宗教が一定の関心を引き付けているという現実には、やはり漠然とした信仰心、あるいは何か宗教的なもの、そういったものを日本社会は必要としていることを示唆します。漠然たる宗教性は若い人の間でもなくなっていないし、おそらくある一定の割合で今後も続くのではないかと思います。そうすると、組織宗教、教団組織が敬遠されるのはなぜかというものが、現実の宗教教団にとっては一番考えるべきことだろうと思っています。何か宗教が必要であるとか、あるいは宗教性みたいなものは大事だと感じて、それで教団を訪ねようという発想になる人が少なくなっているという点です。そうした要請に対応してくれるものを、探しても、あまり適切なものに出会えないという場合や、

教団に属して縛られるのは嫌だという場合があるでしょう。とくに若い世代には教団嫌いが目立つという説がありますが、それは今の若者が宗教に限らず、組織に縛られるのは概して嫌だということにも関係します。たとえば、運動部もどんどん先細りで、なくなりそうなどころがあるといわれます。そうした組織嫌い、束縛嫌いというのが、今の若者の一つの傾向とすれば、若者の教団離れは、教団側だけの責任ではないということになります。しかし、教団離れは別に若者に限られることではないようですし、教団批判はむしろあらゆる世代から出されている。とすれば、やはり教団の側、宗教組織の側も問題があるだろうということになります。

組織嫌いの原因の一つに、組織が組織維持のための組織になっているということへの批判があります。本来宗教の組織というのは、ある宗教的な理念を実現するための手段であつたはずなのですが、時とともに組織維持が主たる目的になる傾向がでてくる。組織維持は、既成宗教、新宗教を問わず、ある程度は追求せざるをえないわけですが、やはりそれが顕著になると、反感というか、

否定的な感情を持つ人が増えてくるのも当然です。近代を通して、新宗教は、既成宗教が欠けている部分を補って成長してきたという側面があります。きわめて大雑把に言ってしまうと、既成仏教が江戸時代に政治権力に從属し、もっぱら儀礼遂行型の宗教になった。現実起こってくる人々の願望、悩み、そう言ったものに応えられなくなった。そこで新宗教が起って来たんだということです。表現は違いますが、ほぼこれに近いことを多くの研究者が言っています。もし近代の既成仏教がもつと人々の現実の問題にも対処するシステムになっておれば、おそらくこれほど新宗教はでてこなかったと思われます。

新宗教は近代社会のある一定のニーズに応える形で伸びてきたわけですが、やはりここに来て新宗教自体も曲り角を迎えてきていると思います。それが教団という形を通しての宗教活動に対するいろんな拒否感みたいなものとしてあらわれてきています。それから高度情報化社会と呼ばれる時代になり、人々が情報を得る手段、それから価値判断をしていく際の拠り所というのが、今ま

でと構造が変わってきています。戦前あるいは終戦まもなくの時代までだと、一人の人間が成長するまでに得られる情報のルートというのは、それほど多様ではなかった。家庭である程度基本的なことを教え、先生もかなり權威があった。地域社会ではタテの人間関係によって、地域社会のルールが教えられた。要するに、行動の基準が比較的はつきりしていたわけです。しかし昨今はご承知の通り、もはや親の權利というのはほとんど地に落ちてないに等しい。学校の先生だって、まあせいぜい内申書で脅かすくらいです。みんな先生が何かいったからといっておとなしく従うわけでもないし、むしろ学ぶ内容では塾の先生を信用したりもします。親や教師のいうことは聞かないのに、テレビで有名なタレントが何かいったりすると、それをまねするという時代です。

つまりそれぞれの家庭とか地域社会で、まず基本的な価値観を形成するという形ではなくなっています。かなり小さい頃から、やたらと雑多な情報がマスメディアを通じて入ってくるという状況になってきています。それで、特定の価値観を共有する集団に所属していて、集団

で動いていくといった形態は、基本的に好まれない時代になってきていると考えられます。そのことが宗教に対する態度にも影響が及んでいるだろうと思われる。

五、教団内ネットワークの可能性

そこでこういう日本人の新しい宗教意識に対応した宗教活動の形態として、どういうものが考えられるか、最後に一言付け加えておきたいと思っています。このような高度情報化時代になりますと、かえってファンダメンタリズムが盛んになると可能性があります。ファンダメンタリズムという概念は、日本ではそれほど馴染みがありませんが、よく原理主義とか根本主義と訳されます。私の場合は、宗教の原点に強く回帰し、固執して、あまり世俗主義との妥協を図らないという宗教形態の意味で使っています。(ファンダメンタリズムに関する最近の議論については、井上順孝・大塚和夫編『ファンダメンタリズムとは何か』新曜社、を参照)

一般にはアメリカのファンダメンタリストのように、非常に政治的な活動をしたり、リベラリズムに対抗する

運動を目指したり、あるいはイスラムの過激な原理主義者のことを指したりしますが、そういう代表的な例の他にも、ファンダメンタリズムに近い運動はいくつかあります。これだけ価値観が多様になりますと、リベラルな宗教というのはかえって面倒です。ある人はこういう価値観がある、別の人はこういう解釈をするというように、多くの主張が並立し、民主的にこれをすべて斟酌するのは、大変な努力を要します。また、いろんな意見を聞かされる方は、どれが正しいか悩むことになります。それよりもこれしか正しいものはないと、一つのものを突きつけて妥協をしないやり方が、ある人々には強いインパクトをもつということがあります。ただし、そうしたファンダメンタリズムは社会的にそれほど大きな力にはなりえないだろうと考えています。私はエホバの証人とか、オウム真理教もファンダメンタリズムの一種に含められると思っております。こういう理解をしている人はまだ少数です。日本の宗教にファンダメンタリズムという概念をあてはめようという試み自体がまだ始まったばかりです。

ですが、私が一つ可能性に富んだ形態であると思っているのは、かなり柔軟性をもった組織母体の中に、臨機応変型のネットワークを組み込むという、一種の二重構造的なものです。これを教団内ネットワークというふうに呼びたいと思っております。

宗教が社会の中でいろんな主張をし、あるいは活動していくには、やはり基本的な組織が必要になります。いくら情報時代といっても人間社会というのは基本的には人と人とのつながりですから、そういう人と人との繋がりを基盤とした組織体というものを欠かすわけにはいきません。しかし組織が強固になった反面、組織維持のための運動となつては、問題が大きいわけです。急激な社会変動、あるいは人々の意識の変化というものに対応するには、そういう基本的な理念をふまえたつも臨機応変に対処できるシステムが有効だろうと思います。そこをネットワーク型のつながりで実行していくことになるでしょう。

これは私が頭の中で勝手に作りあげたものではなくて、すでにこれに近い形態が、いくつか出現しています。

他方、組織がそんなに嫌だったなら、組織をなくしてしまおうという考えもあります。たとえば、キリスト教には無教会主義というのがあって、教会を作らない。非常にゆるやかなつながりで、学ぶべきものは聖書から学べばいいし、先人の書を読んでということであります。しかしこの無教会主義には、ある種のエリート主義の匂いも感じられます。組織なしで宗教的理念を伝えようとしたら、その恩恵にあずかる人は限られてきます。事実、無教会主義を支えた人は、知識階級でした。いくら組織が嫌だといっても、何らかの組織なしの宗教運動というのは、今後も宗教活動の主力にはならないだろうと思います。

また、最近流行の言葉で、情報化時代によく使われる言葉で、ネットワークという語があります。ネットワーク型の運動というものも考えられます。志を同じくする同士のつながりということになりましょうか。しかも今はいろんな情報手段というものがあります。しかし私はこのネットワークだけでは、宗教運動というのはその力を持ち得ないだろうと思います。ではあと何があるかで

それはやはり布教の現場では人々の意識の変化が如実に感じられてるからであろうと思うのです。宗教の捉え方が多様になってるのは事実です。とりわけ、宗教と宗教でないものとの境界線がきわめて曖昧になっているという点が、今の時代の特徴だろうと感じています。神や仏についていえば、一応宗教ということになりますが、しかし今や神とか仏というのは、いろんな意味に使われる。仏像を前にして、これが仏様だというような時代ではない。あくまでもそれは仮のもの、それを通して何かをあらわしているというような考え方は普通の人でもできるような社会です。そういう中で宗教と世俗との境界線というものはだんだん入り乱れてくるのではないかと思います。そういう意識の変化、宗教観の変化に対応していくには、組織自体も柔軟になっていくしかないのではないかと考えております。

最後の方はちよつと未来予測みたいになってしまいました。そういうことには、私はあまり足を踏み入れないようにしていますので、やや曖昧に申しました。今の宗教が抱えている問題、今の日本人が大体どんな状況にあ

るかということ、極めて大雑把にまとめたというふう
に理解していただきたいと思ひます。

(いのうえのぶたか・国学院大学教授)

(本稿は一九九四年九月十六日に行われた当研究所主催の公開
講演会における講演内容に加筆していただいたものです)